

第2章 教育研究組織

1. 現状の説明

(1) 大学の学部・学科・研究科・専攻及び附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。

本学は、多摩帝国美術学校を創始とし、1953（昭和 28）年に多摩美術大学として開学した。以来、広く造形芸術全般について高度な学理技能を教授研究し、あわせて国際社会に対応する幅広い教養を身に付けた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育者研究者等を育成することを目的として、教育研究の充実と高度化を図ってきた。

各専門領域において高い専門性を実現するため、2013（平成 25）年度まで美術学部は、絵画学科、彫刻学科、工芸学科、グラフィックデザイン学科、生産デザイン学科、環境デザイン学科、情報デザイン学科、芸術学科の 8 学科を東京都八王子市（八王子キャンパス）に置き、造形表現学部は、造形学科、デザイン学科、映像演劇学科の 3 学科を世田谷区（上野毛キャンパス）に置いて、2 学部・2 キャンパス体制を敷いてきた。

2014（平成 26）年度には大規模な改組転換を行い、これまでの美術学部（昼間開講）と造形表現学部（夜間開講）の 2 学部体制を美術学部一本化して、上野毛キャンパスに、美術学部として新たに統合デザイン学科、演劇舞踊デザイン学科を開設した（造形表現学部は 2014 年度入試より学生募集停止）。これによって 1 学部・10 学科・5 専攻となり、更に領域に応じた高い専門性を少人数教育で学ぶことが可能となった（資料 2-1 p.10、資料 2-2 p.2）。

学部の教育には専門性だけでなく総合性も実現するために、全学生を対象とする横断的な共通教育カリキュラムを編成する共通教育センターを設けている。共通教育センターは、共通基礎教育系、共通専門教育系、語学系、保健体育系のいわゆる教養・総合教育を受け持つセンターである。

美術研究科博士前期課程（修士課程）は、絵画専攻、彫刻専攻、工芸専攻、デザイン専攻、芸術学専攻の 5 専攻を置き、学士課程から修士課程までの教育を一貫して学科等で担当する。美術研究科博士後期課程（博士課程）については、独立した美術専攻の 1 専攻により組織される（資料 2-1 p.77、資料 2-3 p.5）。

また、研究活動の発信拠点として、2006（平成 18）年より附置の芸術人類学研究所を置いている（資料 2-4）。本研究所は、芸術を基軸に人類学を基盤として、芸術そのものを文明史の中に新たに位置付け直すことを目的としている。特徴としては、学部・大学院に対し、研究員による講義提供、研究プロジェクトへの学生ボランティアの参画、学生による自主制作雑誌への編集支援等を行い、学生の教育・研究活動と有機的に結びついている。

以上のことから、本学の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであると言える。

(2) 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。

1989（平成元）年にはわが国で初めて美術学部二部を開設し、1999（平成11）年には新たに夜間開講の造形表現学部発展的改組転換をして、美術学部と造形表現学部の2学部体

制となった。

美術学部では1998（平成10）年度、当時のデザイン系領域における社会的要請に応えるべく、既設デザイン科を基礎として大規模な改組転換を実施した。建築科を発展的に廃止し、従来の建築科を基礎とする環境デザイン学科を設置した。プロダクトデザインとテキスタイルデザインの統合的な教育展開を行う生産デザイン学科を設置し、クラフト分野の教育研究の充実を図る工芸学科の設置を行った。更にデザインの諸問題と表現を扱う方法が、情報工学の発展により新たな展開を必要とされていたことから、情報デザイン学科を設置した。当時のデザイン科については、伝統的なグラフィックデザインの教育研究を継承し、その目的を明確にするために、グラフィックデザイン学科に名称変更した（資料2-5）。

造形表現学部は、美術学部と同様に専門職業人、独立した作家の育成を目的とし、美術・デザイン教育を夜間に行う我が国唯一の学部であり、交通至便の地にある夜間学部の特性を活かして、社会人教育、生涯教育の機会を提供することにも貢献してきた。しかし、近年の少子化や勤労学生の減少等による全国的な夜間学部の入学者減少の傾向は、本学においても例外ではなく、造形表現学部においては、2009（平成21）年度以降は定員割れが続いていた（資料2-6）。そこで、本学のデザイン教育を更に発展、深化させる必要があると判断し、2014（平成26）年度にはこれまでの美術学部（昼間開講）と造形表現学部（夜間開講）の2学部体制を美術学部に一本化して、上野毛キャンパスに、美術学部として新たに統合デザイン学科、演劇舞踊デザイン学科を開設した（資料2-7）。

美術研究科（修士課程）は1964（昭和39）年に私立美術大学最初の大学院として設置された。その後、1998（平成10）年に博士前期課程（修士課程）芸術学専攻、2001（平成13）年に博士後期課程美術専攻、2002（平成14）年に博士前期課程（修士課程）工芸専攻を設置して、現在の美術研究科博士前期課程5専攻、後期課程1専攻になっている。

これらは、本学が1935（昭和10）年の創立以来、理念・目的に照らして、教育研究組織の適切性について常に検証を行い、時代に即した改革を行ってきたからである。

2. 点検・評価

●基準2の充足状況

本学は、第1章で述べたように、今日に至るまで美術・デザイン領域における専門職業人、独立した作家の育成を理念とし、「高い専門性と総合性の融合」を目的として掲げており、これらの実現に向けて教育研究組織が適切に配置されており、同基準を充足している。

① 効果が上がっている事項

2014（平成26）年4月、これまでの美術学部（昼間開講）と造形表現学部（夜間開講）の2学部体制を美術学部一本化して、美術学部として新たに統合デザイン学科、演劇舞踊デザイン学科を開設した理由は次のとおりである。

八王子キャンパスには、ファインアート系、デザイン系の2つの領域の学科があるが、デザイン系は大別すると人間が何かを作りたいというものづくりの欲求を実現させる学科とそれをほかに伝えたいというコミュニケーションの欲求を表現する学科である。単純に言えばこの2つしかなかった。それはファインアート系も同様であり、描くことによって何かを伝えていく。彫刻は描くのではなく、モノを媒介として表現して伝えていく。これまで、本学にはものづくりとコミュニケーションの両方を兼ね、一体化した学科がなかった。現代はこ

の2つのニーズが一体化したかたちで仕事をする時代になっている。こうして、本学のデザイン教育のなかに時代に即した新たな学科が加わり、美術教育としての専門領域の更なる充実化が図られた。

② 改善すべき事項

最近では2014（平成26）年の大規模な改組転換等、発展的な改革を継続して行っており、大学全体並びに学部・研究科において、新たに改善をすべき事項は認められない。

3. 将来に向けた発展方策

① 効果が上がっている事項

造形表現学部の学生募集を停止し、改組転換によって新たに美術学部に統合デザイン学科及び演劇舞踊デザイン学科を設置したことにより、開設初年度（2014年度）の学生の受け入れは、統合デザイン学科は入学定員120名に対して720名の出願があり、入学者数132名となり入学定員超過率は1.1倍となった。演劇舞踊デザイン学科においては入学定員80名に対して206名の出願があり、入学者数81名となり入学定員超過率は1.01倍となった。

② 改善すべき事項

造形表現学部は、2014（平成26）年度入試からの学生募集停止によって、今後は在学生の卒業をもって廃止する予定である。廃止までの間の在学生への教育条件の維持には万全を尽くしていく（資料2-8）。また、所属の教職員及び施設・設備については、既設の美術学部に移管していく計画である。

4. 根拠資料

- 2-1 多摩美術大学 大学案内 2015（既出 資料1-3）
- 2-2 美術学部 履修案内（八王子キャンパス） 2014（既出 資料1-7）
- 2-3 美術研究科 履修案内 2014（既出 資料1-10）
- 2-4 芸術人類学研究所（パンフレット）
- 2-5 1998（平成10）年度 美術学部 改組転換図
- 2-6 造形表現学部 志願者及び入学者状況（平成21年度～平成25年度）
- 2-7 教育研究組織（平成26年度改組転換の全体図）
- 2-8 多摩美術大学ホームページ（造形表現学部の学生募集停止のお知らせ）
<http://www.tamabi.ac.jp/topics/1304260900-02.htm>